

# 第24回 芸名に込められた 三波春夫、原風景への思い

北村桃児きたむらなしという歌謡作家がいます。本名の北詰文司から「北」を、7歳のときに亡くした実母の旧姓・野村から「村」を、敬愛する浪曲界の改革派だった桃中軒雲右衛門から「桃」を、そして、本名・文司から同音の「児」を組み合わせた筆名です。

主に、歌謡浪曲の作詞・構成をこなし、作曲を担当することもありましたが、代表作が長編歌謡浪曲の傑作『元禄名槍譜 俵屋玄蕃』といえど、その正体が三波春夫だということとはすぐおわかりになることでしょう。

『俵屋玄蕃』のメロディー部分は、職人・長津義司が作曲したものです。浪曲の「節（ふし。メロディー部）」を作れる三波は、自らのイメージを長津に伝えながら完成させたものではないか、と私は勝手に想像します。創作上の人物とされる「俵屋玄蕃」と三波との縁は、すでに旧制中学の頃に始まっていたようです。読書家だった文司少年は立川文庫の講談本がお気に入り、その頃すでに『俵

星玄蕃』を学校で朗読していたことでしたし、シベリア抑留時代には浪曲師・南條文若として自分なりの

「俵屋玄蕃」を演じていたそうで、作品の原型は長い時間を経て、三波の中で少しずつ熟成されていったのだでしょう。

戦後、シベリアから帰国した三波は、昭和29年、浪曲の「新作競演会」に出場しますが、選外となります（そのときの優勝者こそ、酒井雲坊こと、のちの村田英雄でした）。

時代の流れは、すでに浪曲から歌謡曲へと移り、歌謡浪曲という新しい風の到来を知った三波は、歌謡曲歌手への転進を本格的にめざします。心機一転、専門家から歌唱指導を受け、やがてテイテクからレコードデビューも決まります。三波はそのとき34歳になっていました。

でもらうことで手を打ってもらいます。まだ10代半ばの頃、浪曲学校で学び、師匠のいない独学の身に、自ら名づけた「南條文若」の初心を忘れることなく、「三波」には「南」の心が込められていました。自国の歴史に誇りを持ち、自らの原風景を大切にしたい三波は、『終り無きわが歌の道』という歌の中で、次のように綴っています。

私の歌のふるさは 父の民謡  
私の歌の想い出は 母の子守唄  
私の歌のふるさは 流行歌と浪花節

私の歌の想い出は 小学校のオルガン

私の歌の故郷は 日本心（抜粋）



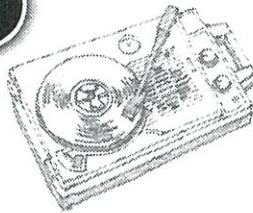
忠義士七十七

長編歌謡浪曲の開拓者である「北村桃児」とそれを演じる「三波春夫」という歌手こそ、歌謡浪曲のテーマにふさわしい「昭和を生き抜いた人物」だったように思います。

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本 浦



デビューする際、三波は「南條文夫」という芸名をあたためていましたが、レコード会社からは浪曲への未練を断ち切るべく「南條文若」とは一文字も重ならない「三波春夫」という名が用意されます。三波は熟慮の後、「三崎」を「三波」とし